

山東鶏告と唐洲——京伝周辺の人脈——

関原 彩

はじめに

山東京伝の活動は、洒落本・黄表紙・合巻・読本・考証随筆・浮世絵・狂歌など、多岐に渡っていることは言うまでもないが、その分関わった人物も戯作者だけに止まらない。京伝周辺の人脈から新たな京伝像を明らかにするべく、拙稿「京伝の後援者たち」⁽¹⁾では、京伝の後援者となっていた三人の大名子息たちに焦点を当て、天明期の京伝の交流関係を見つめ直した。そこで取り上げた黄表紙『葉手嫌息子好々』(天明七年(一七八七)刊)は、京伝の門人と言われる山東鶏告^{けいこう}の作品である。

京伝の門人と言えば、寛政二年(一七九〇)秋に京伝に入門を乞うた曲亭馬琴が知られている。弟京山の随筆『蜘蛛の糸巻』(弘化三年(一八四六)起筆)には、京伝がこの時語ったことが記されている。⁽²⁾

艸ざうしの作は世をわたる家業ありて、かたはらのなぐさみにすべき物なり。今、時鳴じめいある作者皆然しかり。さてまた戯作げさくは弟子としておしふべき事一つもなし。さればおのれをはじめ古今の戯作者、一人も師匠はなし。まづ弟子入りはおことわりなり。しかし心やすくはなしにき給へ。また書かきたる物あらば、みる事はみてやるべし

戯作は家業の合間のなぐさみとして行ふべきものだとし、教えるようなことは一つもないことを理由に、弟子入りを固辞している。また、同じく京山の記した『蛙鳴秘鈔』(天保元年(一八三〇)成立か)では、「是これ迄入門を乞ひ給ひたる人あまたあれども、師弟の約を結びたる事なし」とも語られている。ところが、馬琴が京伝の元を訪れる一、二年前まで、京伝の門人として戯作を執筆していた人物がいる。山東鶏告、山東唐洲とうしゅうである。本稿では、二人の作品の検討から京伝との関わりを考えていきたい。

一、山東鶏告

(一) 先行研究

まずは山東鶏告について見ていこう。鶏告は、生没年未詳であるが、竹杖為輕(万象亭)などの社中にあつた築地住の狂歌師で、狂号海辺汐風、朱翁鶏告とも号した人物であるとされている。

鶏告について、かつては京伝の架空の門人で、京伝自身が用いた名前だと考えられていた。先行研究については、『洒落本大成』第十四卷(中央公論社、一九八一年)や棚橋正博氏の『黄表紙総覧』(青裳堂書店、一九八六—八九年)の解説に詳しいが、改めて鶏告に関する記述を見てみよう。

鶏告Ⅱ京伝説は、早くは岩本活東子の注記に始まる。『戯作六家撰』（安政三年（一八五六）成立）の京伝の項に、活東子の注として「鶏告などもいかにあらん、其人あるにはあらじ、猶たづぬべし」と記されている⁽⁴⁾。

さらに水谷不倒氏は『列伝体小説史』（春陽堂、一八九七年）にて、以下のように述べている。

此年（引用者注…天明六年）別に山東鶏告と名のりて『御富興行會我』『両国信多染』の二部を著しぬ、一は京伝が別号なりといふ。（中略）同八年此の年の著作甚だ多く十二三部に及べり、別に『雪廓女八朔』は京伝門人山東唐洲作とあり、是れ又自家の変名なるべし。

さらに『戯作者小伝』を引いて、以下のように述べている。

いつの世にも小さき文人ありて少し名の知れたる人に乞うて門人となる例、珍しからず、されど京伝には前後に門人としては関亭伝笑（奥の泉侯の家臣なり）唯一人のみなりといへば是等は彼れが仮りの名なること疑ふべからず、而して京伝門人などゝしたるは、是れ又いつの世にも拙き作には己れが名を出だすを恥ぢ、さればとて出さずにはおけぬ事情あり、誰れの補助、若しくは某氏闖などして一方には其の拙劣をかくし、一方にて門人弟子のいかにも大勢あるが如く見せかけ、利益を天秤にかける名家も少からず、京伝も恐らく此の類にはあらざりしか。

京伝Ⅱ鶏告説はその後も受け継がれ、新群書類従所収の『増補青年年表』（国書刊行会、一九〇六年）天明六年の山東鶏告の項に「山東京伝仮名二十六歳」とある。天明七年の山東鶏告の項には「二十七歳（即山東京伝）」と書か

れ、天明八年も同様に記されている。また、朝倉無声『新修日本小説年表』（春陽堂、一九二六年）は「鶏告は京伝の仮号なり」と解説している。『近代日本文学大系』第二十五卷（国民図書、一九二九年）の「日本小説作家人名辞書」でも、けいこふの項目では「山東京伝の匿名」とされた。小池藤五郎氏も『山東京伝の研究』（岩波書店、一九三五年）で鶏告＝京伝であるとしていたが、これに反論したのが森銑三氏で、論争に発展する。

森氏は「山東京伝に関する一二の問題に就いて」（『伝記』一九三七年四月、『森銑三著作集』続編第一卷所収）にて、鶏告の天明六年の黄表紙の署名の印「シホカゼ」が、海辺汐風という狂歌師であることなどを指摘し、実在の京伝の門人であることを論じた。

さらに水野稔氏は、『かいつううぬぼれかがみ云通曰恍惚照子』（山東京伝作画、天明八年刊）一ウニオの挿絵に描かれた状差しに、「伝さま」「京伝兄」と共に「けいこう」の宛名の手紙が入っていることを指摘し、以下のように述べている。⁽⁵⁾

これは門人山東鶏告を京伝と同一人視する通説を裏書するものとも思われるが、わたくしはやはり、鶏告は築地在住の実在の人物で、汐風の狂号をもち、画才もあって、京伝と親しかった人とする説に従いたい。その宣伝の意をもってここに名を出したのであろう。

京伝が自身の作品の挿絵に「けいこう」の文字を入れていることは、注目すべき点である。宛名の文字に「けいこう」とわざわざ記したというのは、水野氏の指摘するように、既に四作品を世に出している鶏告の名の宣伝の意味も込められていたのではないだろうか。

その後は、『黄表紙総覧』でも森氏の説が支持され、現在では鶏告が京伝の実在の弟子であることが定説となって

いる。

(二) 狂歌

別人説の根拠ともなつた、鶏告の狂歌師としての活動はどのようなものであつたのだろうか。『江戸狂歌本選集』(東京堂出版、一九九八—二〇〇七年)に収められた鶏告の狂歌を見てみよう。

鶏告の狂歌名、汐風の名が早くに見えるのは、『吉原細見』に擬えて狂歌師連中ごとに名前を記した『狂歌師細見』(平秩東作編、天明三年刊)である。万字屋万蔵の連に「おり介 まさのぶ」「しほかせ」と、狂歌名を身軽折輔といつた京伝と同じ連に名前が挙げられている。⁽⁶⁾これは数寄屋連の万象亭こと竹杖為輕のグループで、他にも戯作者の岸田杜芳や七珍万宝などが名を連ねている。

狂歌評判記の『俳優風』(唐衣橘洲・朱楽菅江・四方赤良編、天明五年刊)には、京伝と鶏告、さらに京伝の妹の黒鷲式部も数寄屋連としてそれぞれ取り上げられている。⁽⁷⁾

秩父庄司次郎重忠 山東京伝 スキヤ

春の野の梅かかげ清たづねては乞食の家ものぞく重忠

〔頭取〕梅が、や乞食家ものぞかるゝとは俳諧の句もとより詩哥連俳の四相を悟るちゝぶの重忠の役地けいといひ口跡といひよろしふ御座れと狂哥の家にて俳かいの句を元といたさるゝも残念なればうまひ仕うちをまぢますく

花川戸助六 山東黒鷲 スキヤ

山東鶏告と唐洲—京伝周辺の人脈—(関原)

助六がかさにかゝりしあくたいは舌にもつかぬちり桜かな

頭取御一所に評しませふうゐろう売とらやの御趣向五音横通は例のつらねながらつゞくに風をおこそとはよぶござる○花川戸の助六がかさにかゝつて舌にもつかぬちり桜わる□ちる桜ではないか頭取先大ていゝ

忍者 山東潮風 スキヤ

忍び出で見こす親方首尾の松シキの木やしき声が高塀

頭取此度忍者にて見こしの松の上より親方首尾のまつとしきゝてしゐの木三本にたてものゝ声が高イ忍びがへしの釘打付た芸きついでござります芝居好そふだゝ頭取四谷からもほうびが出ました

題材を年末年始に限定した狂歌集の『狂歌新玉集』（四方赤良序、天明六年刊）には、鶏告と京伝の歌が並んで収められている。⁽⁸⁾

花ぐもりさせじとばかり鏡山春たつけふの風やとぐらん 山東鶏告

目に鈴をはるたつけふの空はれてまつげにかゝる霞さへなき 山東京伝

四方赤良による天明狂歌の第三の選集である『狂歌才蔵集』（四方赤良編、天明七年刊か）には、巻第四に鶏告、巻第五に京伝の歌が所収されている。⁽⁹⁾

七夕別 山東鶏告

別路の天のかはらにひれふりて今朝こそ星の石となるらめ

十五夜月 山東京伝

仲秋の月にめでゝは今川かいさめももどく酒宴遊興

その後は、『狂歌浜荻集』（便々館湖鯉鮒編、文化九年（一八二二）刊）には汐風の名で十三首、『狂歌類題』（後杓子栗）（便々館湖鯉鮒編、文政三年（一八二〇）刊）には同じく汐風の名で十一首が収められている。

以上の例から、鶏告は戯作よりも早くに狂歌師として活動していたことがわかる。

（三）黄表紙・洒落本

狂歌師としての活動に加え、戯作の執筆も行うようになる。鶏告作の黄表紙は天明六年から寛政元年までに八作品、また山東唐洲との共著の洒落本が一作確認されている。以下、作品の一覧である。¹⁰⁾

●天明六年刊

・『御詠』両国信田染^{りやうこくしんたのめ} 黄表紙、北尾政演画、鶴屋板、二巻、十丁、「京伝門人 山東鶏告作 印（シホカゼ）」

・『鷺岡勸進』御富興行曾我^{おんとみこうぎょうそが} 黄表紙、北尾政演画、鶴屋板、三巻、十五丁、跋文京伝、「山東鶏告作 印（シホカゼ）」

●天明七年刊

・『見たきもの』化物楽屋異牒^{ばけものがくや} 黄表紙、北尾政美画か、西宮板、二巻、校合京伝、「山東けいこう作 印」

山東鶏告と唐洲—京伝周辺の人脈—（関原）

・『葉手嫌息子好々』黄表紙、北尾政美画か、榎本板、三巻、十五丁、序文京伝、「京伝門人 山東けいこう作」

●天明八年

・『今日現金湯起請』黄表紙、北尾政演画、榎本板、三巻、十五丁、跋文京伝、「山東けいこう作」

・『夜半の茶漬』洒落本、山東鶏告・山東唐洲作、京伝画、鶴屋板、三十丁、序文京伝、「山東鶏告 山東唐洲西筆 著」

●寛政元年刊

・『三国伝来』面光不背釜』黄表紙、北尾政美画、西宮板、三巻、十五丁、「けいこふ作 印」

・『薬師利生』交見世八人一座』黄表紙、北尾政美画、西宮板、三巻、十五丁、「けいこふ作 印」

・『三升艾路考艾』江戸花俳優鬚貞』黄表紙、北尾政美画、西宮板、三巻、十五丁、「けいこふ戯作 印」

この他に、京伝作の洒落本『初衣抄』（天明七年刊）に「京伝門子月地 朱翁鶏告誌」という署名で跋文を寄せ、洒落本『総籬』（同年刊）では画工をつとめている。また洒落本『古契三娼』（同年刊）や、滑稽本『指面草』（天明六年刊）では校閲者として作者京伝の名前と併記されている。つまり鶏告は、天明七年刊の京伝の洒落本三作品全てに関わっていることになる。

『両国信田染』の十ウは「私儀も当年が作者の初舞台でござれば、湯屋、髪結床、自身番、長局わけて昼見世の御評判、よろしく頼み奉り候」という挨拶で締められており、鶏告にとって初作であることがわかる。森氏はこれを引いて、京伝であれば『江戸生艶気権焼』を出した翌年に、湯屋や髪結床以下の評判を乞うなどという卑屈な言辞を弄する必要はないとしている。

初作となった天明六年刊の二作は、京伝が画工をつとめている。『御富興行曾我』⁽¹³⁾には、京伝が以下のような跋文を寄せている（傍線引用者。以下同）。

不老の薬。得がたしといへども。長寿台を作り。馬鹿に附る薬無しといへ共。帆檣丸を製し出す。爰に鶏告なる人。よふもふ築地の果より。石橋万代までに。妄言を伝へむと。五節句に干鱈を遣つて予が門人と成り。三年三月を待ずして三冊の艸子を作る。予是を閲して曰。嗚呼後世おそろ考がみるに屋翼を貸して面屋を取られんも⁽¹⁴⁾延⁽¹⁵⁾なり。

山東京伝二十五の暁に書

鶏告が築地在住とされる根拠は、この跋文の「築地の果より」という記述や、前述した『初衣抄』の署名による。京伝は後年、師弟の約束をしたことはないと言ったとされるが、鶏告のことを「予が門人と成り」と述べている点は興味深い。当時二十五歳という若さの京伝にとって、戯作の師として慕ってくる人がいたことは、少なからず喜びであったのかもしれない。

その後も京伝は、寛政元年を除く天明七年・八年刊の作品では、画工・序文・跋文・校合のいずれかの形で鶏告の作品に関わっている。唐洲との共作である洒落本『夜半の茶漬』の京伝による序文も見てみよう。⁽¹⁴⁾

誰ぞや此夜中に届たる門を擲くは。行暮たる修行者か。たゞしけんどん蕎麦の門違か。同気もとむる鶏唐の面子一卷を懐にして来り。予に校合をせよといふ。三人寄て文殊にあらぬ。ふたり一坐へきりかけし。紋日を逃る智恵ぶくろ。はたくといふは本屋の禁句。きんく万部の書をつむとも。女郎をころす秘密の伝は此一冊にとゞめ

たり。客と女郎の腹（ハツ）によくはいりし如き茶話（チヤワ）なれば。夜半（ヨハ）の茶漬（ウケ）と題号（タイゴウ）して。世に行ふといふことを。廻（マワ）し行灯（テンド）へ楽書（ウタガキ）すことしかり

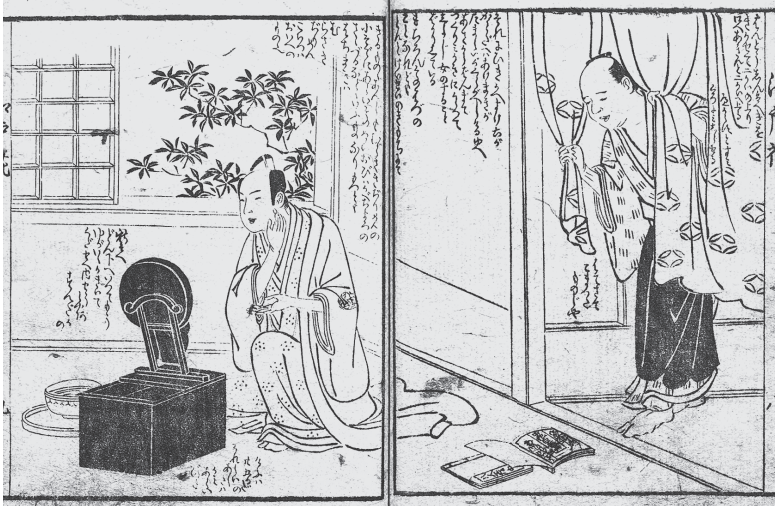
天明八戌申春

山東京伝述
印（巴山人）

これらの記述から、京伝は慕ってくる鶏告の草稿を校合したり、挿絵を描くなどしてサポートしていたことがわかる。

ところで、鶏告はそれ以前に書いた自身の作品を、作品内に反映させているところがある。例えば『化物薬屋異牒（15）』では、「去年信田染の大立者葛の葉が弟狐（ぎつね）、吼噓（こんくはい）といふ者あり」（一ウ二オ）と、登場人物の吼噓を、前年刊行の『両国信田染』に登場させた葛の葉の弟という設定で話を展開させている。

また、『江戸花俳優鬚貞』八ウ九オの挿絵には、同年刊行の『交見世八人一坐』が描き込まれている【図1】。本作は助六と揚巻の魂が入れ替わってしまうというあらすじで、中身が揚巻の助六が鏡に向かって支度をしている傍らに、さりげなく本が二冊置かれている。一冊は表紙の題簽に「八人一座 中」と書かれている。もう一方は開かれた状態で、中央に「中花白養散」との文字が書かれ、左右に人物、左下に「けいこう」の署名が見える。これは『交見世八人一坐』の最終丁の十五ウで、実際の画面構成は、左側に「中花白養散」の看板を配置し、右側に男女の姿が描かれている。構図に変更が見られるものの、その看板の文字から『交見世八人一坐』の最終丁であることがわかり、『江戸花俳優鬚貞』より先に執筆を終えていたことが想像される。両作品共に画工は北尾政美であり、同年刊行の作品の宣伝を兼ねて描かれたのであろう。



【図1】『江戸花俳優最頂』8ウ9オ 国立国会図書館所蔵



【図1】部分

さて、これらの鶏告の作品は、先行研究ではどのように評価されているのだろうか。そこでの鶏告の評価は甚だ低い。例えば、森銃三氏は鶏告の作について「つひに見べきものがなく、凡庸作家といふに終始してゐる」とし、「鶏告と京伝とは、幾らよい師匠に就いても、物にならぬ作者は、つひに物にならぬといふ、一つの例になりさうである」⁽¹⁶⁾とまで言われている。さらに、作品についても「作者一人がいい気持になつて書いたといふだけの、一人よがりの黄表紙で、全く取るに足りない」⁽¹⁷⁾などと酷評されている。これらの評価を検討するため、鶏告の初作である『両国信田染』（以下『信田染』）を詳しく読んでみよう。

（四）『両国信田染』

『信田染』のあらすじは以下の通りである。

両国の占い師である安倍保名は、女芸者のおりよと色事になり、女房の葛の葉を両国の仮宅へ勤め奉公に出して、一家から追い出す。葛の葉は玉藻の前という名で両国仮宅にて女郎となる。そこへ両国回向院に出開帳に来ていた清涼寺の釈迦如来が仮宅に遊びに来て、玉藻の前と深い仲になり、指切りなどの心中立てをする。腕の梵字の彫り物を消そうと釈迦に灸を据えようと、赤梅檀の木像なので良い匂いが漂う。すると、玉藻の前は九尾の狐という正体を現し、回向院の開帳を妨げようとしていたことが明らかになる。そして玉藻の前は回向院脇に飛び去って徳利の形の石となるが、和尚の祈念により狐は滅び、開帳はいよいよ流行ることとなる。

清涼寺釈迦如来像の出開帳は、江戸時代を通じて計十回行われ、『信田染』刊行の前年にあたる天明五年は、六月



【図2】『両国信田染』8才
国立国会図書館蔵

から九月にかけて回向院で開帳された。この開帳は『武江年表』に「六月朔日より、九月朔日迄、回向院にて、嵯峨清凉寺釈迦如来開帳(当年暑季殊に甚だし。朝来群集する事夥しかりしとぞ)」⁽¹⁹⁾とある通り、人々の関心を集めて賑わっていたことがわかる。開帳となった釈迦如来像は、釈迦生き写しの生身の如来像とされ、インド・中国・日本を渡ってきた三国伝来の像として信仰された。⁽²⁰⁾ 本像を模した清凉寺式といわれる仏像が数多く作られたことから、⁽²¹⁾ 信仰を集めていたことがわかる。この釈迦像の特徴としては、頭髮が螺髪ではなく縄目状に束ねた髪型になっていることや、両肩に衣を掛けた通肩の形になっていることが挙げられる。また仏像は赤梅檀という香木で作られ、良い香りがするとされた。⁽²²⁾ 『信田染』ではこれを踏まえて、心中の指切りの際には「玉藻が釈迦如来に指を切せしは、大の山にて赤梅檀の指故、とんだ値打ちが良(七ウ)いので、切った指を香木店に売ろうとする場面が描かれる。また、釈迦の腕の梵字の彫り物を消そうと、玉藻の前が灸を据える場面がある【図2】。灸を据えると良い香りが漂ったのも、赤梅檀の仏像であることによる。出開帳で話題の釈迦像の特徴を、巧みに作中で笑いに変えているのである。

実は江戸の開帳を知る上で、黄表紙は欠かせない資料と言える。開帳についての研究は比留間尚氏「江戸の開帳」⁽²³⁾に詳しく、開帳を扱った文芸作品一覧が掲載されているが、その多くは黄表紙によって占められている。この一覧に『信田染』は入っていないが、天明五年の清凉寺の出開帳に取材した作品として価値があるといえるだろう。⁽²⁴⁾

ここで主要人物に関わる伝説について、確認しておきたい。

葛の葉は、信田森伝説にみえる白狐で、安倍保名の妻となって安倍晴明を生んだが、正体が知られ、「恋しくばたづね来てみよいづみなる信田の森のうらみ葛の葉」という歌を残して去ったという伝説上の人物である。玉藻の前は、三国伝来の九尾の狐の化身で、鳥羽天皇に愛されたが、安倍泰親の法力で正体を現し、下野国那須野に飛び去り殺生石となるという、やはり伝説上の人物である。

この二人の人物を『信田染』では、正体が狐であるという共通点から、安倍保名の妻葛の葉が女郎玉藻の前となるとしている。森氏は「保名が女芸者と出来合つて、葛の葉を追出さうとするのも、面白からぬ筋立である」と述べているが、葛の葉は元々家から去る存在であり、玉藻の前となるという展開のためには避けられないのである。

正体が明らかになる場面では、九尾の狐が徳利の形の石となり、「恋しくばたづね来てみよ回向院まがうゐんついに我身はとつくりとなる」という歌が現れる。これは正体が知られて殺生石になった玉藻の前と、和歌を残して去った葛の葉をやつし、笑いに変えている。

そしてこの狐と当時話題になっていた清涼寺釈迦如来像を、三国伝来というキーワードで結びつけている。森氏は「お釈迦様が、鬱晴らしのために、遊びをなさるといふのはよいとして、相手の女が、実は九尾の狐で云々といふのがしつくりしない」として⁽²⁶⁾、釈迦像と玉藻の前の共通点は三国伝来ということなのである。

以上のように、『信田染』は、狐である葛の葉と玉藻の前、三国伝来の清涼寺釈迦如来、という三人の登場人物を巧みに動かし、彼らの伝承を使って笑いを取った作品なのである。物語に破綻なく、話題となっていた出開帳の釈迦像を題材として、三国伝来と狐という共通点を用いて物語を貫いている点では、評価されてもよいのではないだろうか。

(五) 作中に登場する京伝

ところで、鶏告作品の作中には京伝がたびたび登場する。続いて、鶏告の目から見た京伝が、どのように書かれているのかを見てみよう。

『信田染』では、「九つの尾を北の方へ向けて振り立し故、此本の絵を即ち北尾政演に描かすべしといらぬ御世話まで告げ給ふ」(八ウ九オ)と、九尾の狐と画工をつとめた北尾政演の名をこじつけている。

『化物楽屋異牒』では、物語の序盤で主人公の吼噓が大通になりたいたいと思い、「通丁の京伝が出店で大通を一袋買う」という場面(二ウ)が描かれている。また四オでは、雪女が鷺に向かって「おめへの衣装付けは伝さんの腹といふところだよ」と言っているが、この「伝さん」も京伝のことを指していると考えられる。挿絵の鷺は、頭部が鳥、胴体は着物を着た人間の姿で擬人化されている。本作刊行の前後に出された京伝の黄表紙で、鷺を描いた作品は、調査した範囲では見当たらなかったが、鷺の着ている着物について京伝が助言した、もしくは画工の京伝によって、鷺がこのような擬人化した姿で描かれたということかもしれない。

前稿で取り上げた『葉手嫌息子好々』七ウ八オの、京伝作詞のめりやす「すがほ」お披露目の店先を描いた場面には、登場人物の台詞の中に京伝と鶏告が出てくる。このお披露目の場で、いわば主役である京伝は画中には描かれておらず、「京伝でんはどふしたの。今までいさしたつたが、ちと怪し音八だぞ」とその場を離れてしまっていることがわかる。また、遊女が「もし鶏告さんへ。松色さんが井筒屋にお出でなんしたよ」と鶏告に呼びかけている台詞も書かれている。

主人公の金二郎が莊子屋の三つ蝶という遊女に金を借りる場面(十二ウ十三オ)では、以下のような台詞が展開される。

（遊女三つ蝶）「ぬしはとんと此花生の通り、いくら私が賈いでも、すぼんく〜と尻へ抜けなんすから、どふもなりいせん。よく考へておみなんし」

（金二郎）「もふく〜謝り入やした。そのすぼんく〜と抜けるのが好きだからの事さ。すつぼんの龜の姿の若衆ぶりほどふだ。あんまり異見をしなさんな。人がふさいでみねへと、京伝がそれ見たかと言ふはな」

金をすぐに使ってしまうことを、底を抜いた花生けで譬えている。「京伝がそれ見たか」と言うことに関しては詳しいことはよく分からないが、本作には楽屋落ちのような台詞や内容が所々に散りばめられている。

金二郎と遊女の三つ蝶がそのような会話を展開させている傍らには、廊下を歩く遊女が描かれているが、その台詞も見逃せない。「ヲヤ鶏告さん、大分道が違ふさんすね。伝さんかへ、花魁のところにお飯を食べてお出でなんすよ」と、鶏告が京伝を探していることが窺えるのである。これは、京伝と鶏告が別人であることを裏付けるものではないだろう。また、京伝が実際に花魁の元に通っていたことから生まれた台詞であろう。

物語の主要人物以外の者たちが楽屋落ちの内容を話しているというのは、他の作品にも見られる。『江戸花俳優眞』⁽²⁸⁾十才では、助六と揚巻が籬越しに会話をしているが、その横を通る遊客と若い者は以下のような会話を繰り返している。

「二丁目へ入ったのは文京さんではねへか。後ろつきがよく似たぜ」

「そうだろう。長崎屋に伝公が見えたつけ」

「この頃は毎晩お見へなさりやす」

文京とは松前藩主松前道広の弟百助のことで、京伝の後援者として知られている。長崎屋は、先に挙げた「すがほ」のお披露目の場となった店である。このような作中の記述から、鶏告は京伝の交友関係や行動範囲をよく把握していたことが窺える。

さらに、鶏告の作品には、師匠である京伝の創作姿勢を窺わせる記述が見られる。まずは『両国信田染』の例を見よう。釈迦の腕の梵字を灸で消そうとする場面では「左から先づ据へんせう。こういふ洒落は京伝さんがきつい好きさ」（八オ）と言っている。左から据えることが何の洒落になっているのかは不明であるが、京伝の洒落の好みがかかる。また、玉藻の前が徳利の石になり、和尚が供養する場面では、「回向院は浄土宗だに、なぜ仏子を持つてみるか」（九ウ十オ）と言ひ、京伝の助言が書かれている。京伝は草稿の校合だけではなく、内容についてもアドバイスを行っていたようである。これらは京伝の創作姿勢を知る上で、重要な手がかりになると言えよう。

なぜ鶏告は、作中に京伝を登場させているのだろうか。天明期の黄表紙は、作者に近い人々にしか分からないような楽屋落ちを含んだ作品が多く存在する。これは読者に、作者周辺の人々を想定して書かれているということを示している。鶏告が京伝の吉原通いをネタにしたり、実際にあっためりやすのお披露目の様子を作中に描くことは、京伝を知る人々へ向けた、ある種の読者サービスとも言えよう。読者は京伝の情報を面白がるのが出来る一方で、鶏告は既に戯作者として活躍している京伝の権威を借りていたのではないだろうか。

ところで、鶏告の戯作の活動時期は、草稿を執筆していたと考えられる天明五年から寛政元年までに限られている

が、これは何を示しているのだろうか。以下に述べることは資料が足りず確証は得られないが、その可能性について考えてみたい。

まず活動の終了時期から想起されるのは、寛政の改革による京伝の筆禍である。取り締まりの対象となった寛政元年刊の『黒白水鏡』（石部琴好作）では、画工をつとめていた京伝も過料処分となった。寛政三年の洒落本三部作の筆禍ほどの重い罪ではないものの、『箱入娘面屋人魚』（山東京伝作、寛政三年刊）の板元蔦屋重三郎の序文によれば、戯作を辞めようとした京伝が、蔦屋の懇願によって再び筆を執ったことが分かる。またこれ以降、京伝は他の作者の作品で画工をつとめることはなくなったことから、京伝にとって重大な事件であったことが窺える。京伝と鶏告のちらの意志かはわからないが、この筆禍をきっかけに京伝と距離を置いた可能性は考えられる。

またこの時期に、恋川春町や朋誠堂喜三二などの武家作家が戯作の世界から退いたことが知られている。鶏告の素性や身分は未詳であるが、彼らと同様に寛政の改革の余波によって戯作から身を引いたという可能性もある。この武家作者の退場は、中野三敏氏によって、狂歌壇や戯作に見切りをつけていた彼らが、改革を理由に退いたという指摘もされている。⁽²⁹⁾天明に流行した狂歌や戯作は天明末期には陰りが見え始め、それを察した者たちが手を引いたというのである。

いずれにせよ、天明期と寛政期では狂歌や戯作に関する環境が変化している。活動期間が短く、数えるほどの黄表紙作品しか残していない作者も多く存在する。京伝の門人として計九作品を残した鶏告も、時代の転換期に突如戯作の活動を辞めてしまったのであった。

二、山東唐洲

(一) 先行研究

鶏告と同時期に作品を残している山東唐洲も、京伝の門人と考えられる人物の一人である。彼も鶏告と同様に、かつては京伝の別号だと考えられていた。⁽³⁰⁾しかし森銑三氏が、鶏告同様に実在の門人だとする説を述べ、⁽³¹⁾『洒落本大成』や『黄表紙総覧』もこの説に従っている。

ただし、唐洲の伝についてはよく分かっていない。『洒落本大成』には「唐洲も『狂歌師細見』によれば、元李綱夫妻の社中にあつた狂歌師らしい」と指摘されている。これを受けて棚橋氏は「元李綱に近い狂歌師ということであれば、唐洲の号はあるいは唐衣橋洲の頭尾を戴いたものか、ただし偶然の一致かも知れない」と述べている。⁽³²⁾

ところが、『狂歌師細見』を確認してみると、「おち栗やちゑ」の連に名が見られるのは、「とうしやう」のようである。⁽³⁴⁾さらに、石川了氏「『狂歌師細見』の狂歌作者比定」によれば、この「とうしやう」は『落栗庵狂歌月並摺』(元李綱編、天明三年刊)に歌が見られる、左礼は道性という狂歌師であるという。左礼は道性の作例は、調査した限り『落栗庵狂歌月並摺』の一首しか見当たらないが、⁽³⁶⁾唐洲の狂歌も確認できないことから、『狂歌師細見』の「とうしやう」が唐洲の可能性は低いと言えるだろう。

(二) 黄表紙・洒落本

唐洲作の作品は以下の通りである。

●天明八年

- ・『〈首尾松見越松〉雪女廓八朔』黄表紙、喜多川歌麿画、蔦屋板、二巻、十丁、序文京伝、「京伝門人 山東唐洲作」
- ・『曾我糠袋』洒落本、喜多川歌麿画、蔦屋板、二十二丁半、序文京伝、「唐洲著述」
- ・『夜半の茶漬』洒落本、山東鶏告・山東唐洲作、京伝画、鶴屋板、三十丁、序文京伝、「山東鶏告 山東唐洲両筆著」

共著の洒落本を除き、唐洲作の黄表紙・洒落本は共に歌麿が画工をつとめ、蔦屋から出されている。また、京伝作の『仁田四郎』富士之人穴見物』（北尾政演画、天明八年刊）には序文を寄せている。

以上のように、唐洲の著作活動は天明八年刊の作品のみという、短い期間に限られている。『曾我糠袋』の巻末には「待宵 新妓婦志 唐洲述 全 近刻」という広告が見られるものの、本書は未刊に終わったようである。鶏告と同様に、何らかの事情によって戯作の世界から離れてしまったことが想像させられる。

唐洲の初作である『雪女廓八朔』⁽³⁸⁾に寄せられた、京伝の序文を見てみよう。

月令仲春條下日鷹化為鳩云云。傾城の小指の夜具と化し。三粒骰子の目の御寺の巨燧もたちまち大振袖と化す。一日唐洲怪本の艸稿を持来つて予に見す。作者の艸稿は狐の藻の如しと云へども。唐洲能く尻尾を見せず。その凄き事。白齒の地獄に抱附かれたるよりも怖く。我も身柱下からぞつとして。爰に筆を投捨てぬ。

申の初春

京橋の御ぞんじ述 印（京伝）

唐洲が京伝の元に草稿を見せに来ていたことがわかる。また、『曾我糠袋』の京伝の序文にも「唐洲なる人の作せし。這箇の。草稿を閲るに」とあり、「此書を等閑にせば。宝の山に手をむなしくするに等かるべし」と述べられている。また、『雪女郎八朔』最終丁の十ウでは唐洲本人が口上を述べている。

ちよと口上を申上げます。私儀は年来白壁の中に鯨と睨めくらして暮らし、初舞台のほやく／＼作者御屋敷女中の御目からは初奉公の下方育ち、大通方のお心にはまだ生息子の買習ひおき、老ひ方はあれ見やな乳吸齒もかけねへ野郎だと御悪態仰ろふし、お子様方はおいらが神に入れまいとおなぶりなされず、女郎様方はまだ客なれぬ振袖新造と思し召し、いづれも様今年より御鼻屑下されませ。がきに絡まる鳶の新板物、悪い所は唐洲にも筆の

誤りと御流し下されませ。則唐洲をくんじて読めば、鳥の初声只アホウ／＼と御評判願ひ上ます。



【図3】『雪女郎八朔』10ウ
国立国会図書館蔵

口上に加え、挿絵には口上を述べる唐洲の姿も描かれている【図3】。縞の着物に羽織を着た唐洲は、手をついて挨拶をしている。書斎らしき部屋には「京伝」の署名が書かれた掛け軸が飾られている。

『黄表紙総覧』では口上の傍線部と肖像画から、「江戸在住の町人であったと推定してよからう。ただそれ以外について

は明らかになし得ない」としている。江戸城の鯨の見える白壁の家に暮らしているということで、大きな商家などが想像させられるが、それ以上のことはわからない。また、今回は狂歌活動を行っていたかは疑わしいという指摘に止まったが、唐洲がどのようなネットワークで活動した人物なのかは引き続き調査していきたい。

おわりに

京伝の門人と言われる山東鶏告と唐洲について、先行研究を踏まえて改めて戯作や狂歌の活動について検討した。馬琴についての逸話からは弟子を取らないという印象が強い京伝だが、二人の作品に寄せている京伝の序文や跋文からは、彼らの草稿に目を通していたことがわかる。また鶏告の作品には、京伝の執筆の姿勢が書かれ、作品を書くにあたってアドバイスをしていたことが窺える。彼らの作品は、京伝を知る上で貴重な資料と言える。

天明期の京伝は戯作や狂歌というネットワークを中心に、洒落本や黄表紙を執筆していた。その後寛政の改革を経て、寛政期後半からの晩年は考証随筆に没頭し、より多くの文人や絵師などと交流するようになる。例えば、江戸時代の絵師を代表する谷文晁には、考証に関する資料を見せてもらっていた。京伝の活動を考える上で欠かせないこの考証趣味のネットワークは今後の課題とし、引き続き京伝周辺の人脈に焦点を当てることで、京伝の活動について考察していきたい。

【注】

(1) 『山東京傳全集』第十四卷月報（べりかん社、二〇一八年）。

- (2) 引用は『近世物之本江戸作者部類』(岩波文庫、二〇一四年)による。
- (3) 注2に同じ。
- (4) 引用は『燕石十種』(国書刊行会、一九〇七年)による。
- (5) 引用は水野稔『山東京伝の黄表紙』(江戸文芸新考一、有光書房、一九七六年)による。
- (6) 引用は『寝惚先生文集・狂歌才蔵集・四方のあか』(新日本古典文学大系八四、岩波書店、一九九三年)による。
- (7) 引用は『江戸狂歌本選集』第三卷(東京堂出版、一九九九年)による。
- (8) 注7に同じ。
- (9) 注7に同じ。
- (10) 『黄表紙総覧』と諸本を参照し、書名、画工、板元、巻数(黄表紙のみ)、丁数、作者の署名を記した。京伝が関わっている場合は、その旨も記載した。
- (11) 東京都立中央図書館加賀文庫本(函五二一一二)による。また、国立国会図書館所蔵本(京一四〇二)も参照した。
- (12) 「山東京伝私記」(『森銚三著作集』続編第一卷、中央公論社、一九九二年。初出『国語国文』一九三六年六月)。
- (13) 国立国会図書館所蔵本(二〇七一五五)による。
- (14) 国立国会図書館所蔵本(京乙一八一)による。
- (15) 東京都立中央図書館東京誌料本(四七五二一一二〇)による。また、国立国会図書館所蔵本(二〇七七一三)も参照した。
- (16) 『続黄表紙解題』(中央公論社、一九七四年)『両国信田染』の項。
- (17) 注16書、『葉手嫌息子好々』の項。
- (18) 回向院での出開帳が行われた年は、比留間尚「江戸開帳年表」(『江戸町人の研究』第二卷、吉川弘文館、一九七三年)によると、元禄十三年(一七〇〇)、享保十八年(一七三三)、明和七年(一七七〇)、天明五年(一七八五)、享和元年(一八〇一)、文化七年(二八一〇)、文政二年(二八一九)、天保七年(二八三六)、嘉永元年(二八四八)、万延元年(二八六〇)である。
- (19) 引用は『増訂武江年表』一(東洋文庫、一九六八年)による。
- (20) 釈迦在世中に優填王が造像したという由緒を持つ像を、北宋・雍熙二年(九八五)に東大寺の齋然が模像を作らせて、日本

に持ち帰ったとされている。清凉寺の釈迦如来像については、『清凉寺釈迦如来像』(日本の美術五二三、至文堂、二〇〇九年)、佐々木剛三『清凉寺』(美術文化シリーズ九二、中央公論美術出版、一九六五年)などを参照した。

- (21) 鎌倉時代には盛んに模像が造られた。西大寺の釈迦如来像(建長元年(一二四九))などがある。
 (22) 実際には桜材であるとされる。

- (23) 前掲注18書所収。

- (24) なお、文芸作品一覧には、享和元年の清凉寺釈迦如来の出開帳を扱った黄表紙『嵯峨釈迦』開帳延喜繁花』(十返舎一九作、享和元年刊)は掲載されている。

- (25) 注16に同じ。

- (26) 注16に同じ。

- (27) 東京都立中央図書館加賀文庫本(函五二一九)による。また、国立国会図書館所蔵本(二〇八一五六九)も参照した。

- (28) 東京都立中央図書館東京誌料本(四七五二―二五二)による。また、東京都立中央図書館加賀文庫本(函五二一九)、国立国会図書館所蔵本(二〇七一一二)も参照した。

- (29) 中野三敏「南畝における「転向」とは何か」(『十八世紀の江戸文芸』岩波書店、一九九九年。初出『国文学 解釈と教材の研究』第二七巻八号、一九八二年六月)。

- (30) 第一章(一)先行研究で取り上げた文献に、京伝『唐洲説が見られる。『近代日本文学大系』の『日本小説作家人名辞書』では、鶏告と同様に、山東唐洲は「山東京伝の別号」としている。『増補青本年表』天明八年の山東唐洲の項には、「二十八歳(即山東京伝の変名)」と書かれている。水谷不倒氏『列伝体小説史』は「是れ又自家の変名なるべし」と述べる。小池藤五郎氏も『山東京伝の研究』で同様の説を取っている。

- (31) 注12に同じ。

- (32) 『洒落本大成』第十四巻(中央公論社、一九八一年)。

- (33) 『黄表紙総覧』前編「富士之人穴見物」の項。

- (34) 『寝惚先生文集・狂歌才蔵集・四方のあか』(新日本古典文学大系八四)の底本である『天明期・吉原細見集』(近世風俗研究会、一九七七年)所収の複製本では、「や」と「ゆ」が判別しづらいが、『江戸狂歌本選集』第十五巻(東京堂出版、二〇〇

七年) 所収の慶應義塾図書館本(野崎左文筆写本)では、明らかに「とうしやう」と書かれており、翻刻も「とうしやう」としている。

(35) 石川了『江戸狂歌壇史の研究』(汲古書院、二〇一一年。初出『狂歌師細見』の人々)『近世文学俯瞰』汲古書院、一九九七年)。

(36) 『江戸狂歌本選集』の索引を利用した。

(37) 国立国会図書館所蔵本(二〇八—六六)による。

(38) 国立国会図書館所蔵本(二〇七—七五)による。